

## 《2007年6月関西サロン報告》

【日時】2007年6月28日(木)19:00～20:30

(→その後「Supporter's Field」にて懇親会)

【会場】新阪急ビル 第10会議室(大阪・梅田)

【演題】「日本サッカー史」出版秘話

【講師】後藤健生(サッカージャーナリスト)

【参加者(会員)】阿部博一、賀川浩、梶田孝史、貞永晃二、高田敏志、中曾千鶴子、福西達男、本多克己、松田保、宮川淑人、依藤正次(以上11名)

【参加者(未会員)】浅田良太、荒木茂、生駒義博、伊藤顕、伊原千晶、奥田篤、尾崎正章、鎌田敏晴、岸田雅隆、郷原祐史、古賀康彦、栄直樹、末松良太、須田三友紀、田中基、田中麗、名取香織、根本いづみ、萩原秀昭、林浩史、藤本崇、栞田亮志(以上22名、その他1名)

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】根本いづみ

\*\*\*\*\*

# 『日本サッカー史』出版秘話

後藤健生(スポーツジャーナリスト)

\*\*\*\*\*

## 1. 売れなくても必要な本を書いたワケ

今日は「出版秘話」を話すということなのですが…秘密なんてないですよ(笑)。だから、『日本サッカー史』を書きながらどんな感情を持ったかなどについて話そうかなと思います。

まず、これを読んだ方はどれくらいいますか？(数人が挙手)あまり売れてないようですね(笑)。在庫も少なく、本屋さんには並んでいないので、ぜひ注文して…よろしくお願いします。

この本の前に、『日本サッカー史 代表篇—日本代表の85年』という本を2002年に出しています。

2002年は、皆さんご存知のとおり日本でワールドカップ(W杯)が開かれた年。私自身も仕事が忙しかったのに、何でまたそんな時に歴史の本なんか書いたのか…今考えると不思議です。

たとえば今年のように、W杯の翌年というのはフリーランスのライターにとっては暇な年。アジアカップ(7月7日開幕)が近づいてきて、ようやく忙しくなってきましたが、本来ならこういう時に書けば良い。でもまあ、W杯でサッカー界が少しでも盛り上がっているときにということで、無理をして出版しました。そしてこの本をもとに、改訂版を書きました。

この本を企画した人は双葉社のベストセラー『クレヨンしんちゃん』を担当した方で、湘南高校サッカー部出身。今もサッカーが好きで『サッカー批評』も彼が手がけた雑誌です。

『クレヨンしんちゃん』で儲かる仕事をしたから、彼はもう、自分の趣味に合ったことをしても会社からお叱りを受けない立場。この『日本サッカー史』という、あまり売れそうにないけれどお金はかかるという本が出せたのも、彼と、双葉社の協力があってのことでした。

## 2 『日本サッカー史』というタイトルのプレッシャー

日本サッカー史を作れという話は以前からありましたが、こういう本を書くのは、ライターとしてはかなり覚悟がいります。通史というのは、ある部分だけを切り取るのではなく、自分の知らないことも調べて、それなりのものを書き上げなければならない。これは相当プレッシャーのかかる仕事です。

本来なら、僕はこの本の著者ではなく読者になりたかった。そう、昔はよく、賀川さんの書いたものに「ここが違ってますよ」なんてハガキを出していました(笑)。できれば今回もそうしてイチ読者として楽しみたかったのですが、賀川さんがなかなか書いてくださらないから、自分で書く決心をしたわけです。

初版本を出す際に一つ大きな問題だったのが、タイトル。『日本サッカー史』というのは、かなりの責任を負わなければならない重いタイトルです。

今後、僕より若い世代の人が日本サッカーの歴史を書くとなれば当然、2002年と2006年に書かれたこの本を土台にするでしょう。ということは、ここに間違いがあろうものなら、それが日本の歴史として定着してしまう。そういう恐ろしさがあります。

もう少し逃げた(ごまかしの効く)タイトルにすることもできたのですが、日本サッカー史と言えば日本サッカー史だし、他に適当なタイトルもないし…ということで、つけました。

ただ、この本は“代表チームを中心にした”という点で逃げなんですね。

もちろん、代表チームは日本サッカーの中心的存在ではありますが、歴史というのはただそれだけではない。たとえば最初は師範学校でやっていたサッカーが、高等学校や大学に普及した。そうした組織的・システム的な変化が本当のサッカー史なわけですが、そこまで追いかけて始めると非常に話が広がってしまい、とてもこんな一冊には収まりきれない。それを全部書くのは難しいのと、それから書きやすいという理由で、代表チームの歴史ということでまとめることにしました。

代表チームの歴史を書くということはつまり、選手選考の面から国内サッカーの歴史の動きを、代表強化の面から育成システムの整備などについて触れざるを得ない。代表チームを中心に書いていけば、日本サッカーの歴史をひと通り追えるので、2002年版では『日本サッカー史 代表篇』という名前にしました。

それから4年。今度はもう一段強くなった代表について書くつもりでしたが、残念ながら去年のW杯は…。そんなわけでこの4年についてはさらっと書くにとどめ、また『代表チームの90年』としてまとめました。

### 3 監督も選手も通訳も、そしてライターもミスをする

後書きに詳しく書いたのですが、この本をまとめるにあたり、とある膨大な新聞スクラップを参考にしました。これがなかったら、書くのは相当難しかったと思います。

スクラップを作成した池原先生は「日本サッカー狂会」の幹事長をやってらした方で、造園が専門。代々木公園などを設計され、最後は筑波大学の名誉教授になりました。

スクラップには、一般紙、スポーツ紙、英字紙などのあらゆるサッカー記事、サッカー関連の広告まで全てが整理されています。当時はサッカーの記事が少なかったからできたとも言えますが、日付順に残されているという点からも、貴重なもの。戦後のある時代を追ううえで、非常に役立ちました。

そうして2002年の終わりになんとか出版しましたが、そこには当然、ミスがあります。

「監督もミスをする、選手もミスをする、通訳もミスをする」とはオシム監督の言葉ですが、全くそのとおりで、こういう本を書けば当然、間違いがたくさんある。それに関する反応を受けて、改訂版のときに調べ直す。そうして、歴史というのは進歩していくのだと思います。僕のこの本を参考に、また若い世代の人が何かを調べて書いてくれるかもしれない。ですから、最初の版を出したときはどんな反応があるかが非常に楽しみでした。

### 4 サッカーかラグビーか？ 日本で最初のフットボール

まず、一番激しく、鋭く、大きく反応してきたのがラグビー界。

要するに、日本で最初に行なわれた“フットボール”はサッカーなのかラグビーなのか、という話です。これについてラグビー界はとても神経質で、反応も早く、かなり膨大な資料のコピーを送って頂いたりしました。

僕は初版で、「日本に招聘された英国海軍のアーチフォード・ダグラス少佐が海軍兵学寮でやったのが日本サッカーの始まりだ」と安易に書いてしまった。

これは昔、新田純興さん(元・日本サッカー協会常務理事)たちが作った『日本サッカーのあゆみ』にそう記してあり、サッカー界では常識として伝わっていた話です。それをそのまま書いたら、秋山陽一さん(ラグビー史家)を中心とするラグビー界から「あれはサッカーではない、ラグビーだろう」という反応が来ました。

その点について回答しなければならなかったので、今回の改訂にあたり、幕末維新期に行なわれた最初のフットボールがどういうものだったかということ調べました。

やってみると、実はダグラス少佐は中佐だった、なんて話も出てきましたが(笑)、彼の息子が書いた伝記本で、ダグラスさんの人となり、海軍兵学校の様子などを見ていくうちに、そこで行なわれたのは、とてもサッカーと言えるものではないだろうということが分かりました。

また、歴史的に見ると、1863年にFA(イングランドサッカー協会)が設立され、ようやくアソシエート式のフットボールのルールができた。時代的にも、その10年後に、英国人が日本人にサッカー——アソシエート式フットボール——をさせたとは言い難いですね。逆に言えば、それがラグビーだったと証明することもできないのですが…。

ただ一つ言えることは、そこでフットボール、それもキッチリしたルールではなくフットボールの真似事のような遊びを、日本人学生らとやっていたということです。それから、ほぼ同じ時期に、工学寮という建築関係の学生を集めたところでも、スコットランド人の教師がフットボールをやらせたということも分かりました。“日本で最初に”という点では、日本人が混じらずに行なわれた、居留地での外国人同士のフットボールがあります。

それについては、横浜の開港資料館で当時の英字新聞を片っ端から読みました。実はそれに関する研究書があったので、なにも新聞を全部読む必要はなかったんですが、最初に手をつけたときはその存在すら知らなかった。だけれど結果的に、おかげで単に研究書を読む以上のこと——いつ誰それ将軍が亡くなったとか、ナントカ事件が発生してその犯人が捕まったとか、どこどこで火事があった等——、当時の横浜の雰囲気を知ることができ非常に面白かったですね。

イギリス人は記録を残すことのマニアですから、当時、何町何番地に誰れさんが住んでいて、その人はどこの会社に勤めていて…なんてことが相当詳しく残されています。それらとフットボール関連の記事に出てくる選手の名前やFAの役員名などをつき合わせていくと、かなり面白いものが見えてきそうです。サッカー史とは別の研究テーマになったり、あるいは小説を書くこともできるんじゃないかなと。そう、幕末期についての調査は今回の改訂で楽しかったことの一つです。

## 5 ヘルタプラッツ・スタジアムを探して

資料などで昔のことを発見し、同時に現場に足を運んで実際にその場を見ても面白かったですね。一つ挙げるとすれば、ベルリン・オリンピックで日本がスウェーデンを破ったヘルタプラッツ・スタジアム。昨年のW杯決勝が終わった翌日に訪れました。

実は2001年にも探したのですが、見つけれませんでした。地元のお年寄りに尋ねても、「もう無いよ」と言う。それで2002年の初版本では、ヘルタプラッツ・スタジアムの跡は残っていないと書いてしまいました。

ところがその後です。当時ベルリンで発行された市街地図をよく見てみたら、どうやら僕が実際に見に行った場所は少しズレていて、現在の地図を見ると、それらしきグラウンドがある。ひょっとしたらと思いました。

それでも、昨年、ベルリンの会場でプレスオフィサーのアシスタントを務めるヘルタ・ベルリンの女性広報にも聞いたのだけれど、知らないと言われてしまった。歴史はその国・土地の人に聞けば分かるような気がしてしまうけれど、よく考えれば、日本人だから日本サッカー史について詳しいかというところじゃないのだから、まあ当然ですよ（笑）。

しかし地図を頼りに行ったら、ヘルタプラッツ・スタジアム跡にたどりつきました。現在は人工芝の少年サッカーのグラウンドになっていますが、最前列のスタンドのベンチの石組みが3列ほど残っていて、古いスタンドの跡であるのは間違いない。「ああ、これがヘルタプラッツなのかあ！」と、非常に楽しい経験でした。

## 6 日本のサッカー史跡をたどって

日本でも色々な場所を探検しました。

一つは、日本が初の国際試合を中華民国と行なった(0-5で敗戦)1917年の極東選手権で使った芝浦の埋立地。本には“芝浦の埋立地”とあるけれど、ずっと東京に住んでいてもそれがどこなのかは分からない。どこなのだろうと何十年も前から気にはなっているけど、特に調べることもありませんでした。

それを今回、当時の新聞に載っていた会場の案内図と地図とを見比べてみた。すると確かにそこは芝浦沖に最初にできた埋立地。東京湾は今も埋立地だらけですが、当時の人たちにとってはそこが“芝浦の埋立地”だったのです。お台場に向かうゆりかもめの「日の出駅」の辺りに、ここがグラウンドだったのだろうと思われる場所を見つけることができました。

それから、1923年の極東選手権・大阪大会が開催されたグラウンド。今の八幡屋公園にスタジアムがあったと知り、大阪に試合を見に来たついでに足を運びました。公園の事務所には何も資料がなかったけれど、先日はそこでフットサルのアジア選手権が開かれたので、観戦がてら久しぶりに行ってきました。

あるいは、第1回全日本選手権(現・天皇杯)が日比谷公園で行なわれたという話。これも前々から、日比谷公園でどうやってサッカーの試合をしたのだらうと気にはなっていました。

調べてみたら簡単なことで、公園の南の端に当時は陸上のトラックと、真ん中にフットボールができる芝生のグラウンドがあったらしく、実際行ってみると「ああ、ここなんだな」とすぐに分かります。

あとは、外国人が最初にフットボールをした場所・横浜。これはぜひ史跡として残すべき場所なのですが、一筋縄ではいきませんでした。

一つは、横浜に駐留していたイギリス陸軍の兵営の中。まあ、これは間違いない。今でいうと、「港の見える丘公園」の上ですよ。

それから、バレー(valley=谷)と呼ばれたところ。昔の新聞記事には「陸軍と海軍の駐屯地の間にある『バレー』で行なわれた」と書いてありました。駐屯地の場所付近に行ってみると、港の見える丘公園から下っていく道はかなり深い谷・溪谷になっていて、その下には平らな場所がある。こんな傾斜地でフットボールをするものだろうかと考えてしまうのですが、でもまあ、昔のイギリスの記録によると、相当な傾斜地でもフットボールをしていたようなので、これくらいならやるかもしれないとも思ったりして――。

これはいまだに確証を得られていないのですが、まあ楽しい思い出です。協会は無駄遣いばかりしていないで、こういう場所をしっかりと特定して、例えば「東京高師のグラウンドだった場所」というようにサッカー史跡として記念碑でも残してほしいですよ。

## 7 「資料篇」最大の欠落は

資料編は、4年前に出した本では巻末の付録だったのを膨らませたものです。

当初は国際Aマッチ——代表チーム同士の試合——だけを載せていたのですが、ある時期には日本にはAマッチなんてものはほとんどなかったし、アーセナルやパルメイラスといった諸外国のクラブとの試合の方がよほど重要だった時期もある。それで、クラブチーム相手の試合も含めて、日本代表が行なったホーム&アウェー全試合を網羅したものを作ることになりました。

こういう資料は、ヨーロッパに行けば簡単に手に入ります。僕のところにもヨーロッパから、何々の試合の結果を送ってくれという問合せが結構来る。彼らの感覚からすると、日本語のものを横文字に直して送ってくれば済むだろうということなのでしょうけれど、日本にはまとまったものがありません。何とかしなければと思いつながら、これもまた手をつけられずにいました。

特に難しかったのは、相手チームのメンバー。日本側だけであれば、協会にも資料があるし、だいたい調べがつく。相手チームも、ヨーロッパの代表クラスであれば向こうに資料があるし、インターネットで調べられるわけですが、アジアではそうしたものがまとめられていません。ましてやクラブチーム、日本代表がヨーロッパ合宿中に地元の下部リーグの小さなクラブとした試合となると…。

当時の『kicker』誌などを見ればスコアは載っていますが、当然ながらメンバー表などは載ってない。そうしたものについてはまず、日本国内にある資料(協会機関誌、新聞、雑誌)で分かる部分をどんどん埋めていき、それから国立国会図書館やアジア経済研究所にある海外の新聞。それでもダメな場合は、現地に住むサッカー好きの友人に頼んで調べてもらいました。

例えば、オランダ在住の中田徹というライター。彼はよほど興味を持ったのか暇だったのか(笑)オランダ中を歩き回り、試合が行なわれた街のローカル紙あるいはクラブ史を研究している物好きなおじさんなどを訪ねて、相手チームのメンバーから得点者、レフェリー、天気、観客数まで詳しく調べてくれました。そうした友人のおかげで、相手チームについても予想していた以上に埋めることができました。

その一方で、日本チームでも分からないものが、僅かですがありました。この本で欠落している一番重要な情報は、1971年のヨーロッパ遠征中に行なったアイスランド代表戦です。これは、日本チームがヨーロッパのナショナルチームにアウェーで初めて勝った試合。相手側に関してはアイスランド協会に問合せで判明しましたが、なんと日本の方が、先発・交代・サブ不明という恥ずかしい状況になっています。

イギリスに住む友人がアイスランドに行くというので調べてきてくれるよう頼んだのですが、返事がないところを見ると、おそらく分からないのでしょう。今日いらっしゃる皆さんの中で、何か情報を持っている方がいればぜひ教えてほしいです。

## 8 本当は 99 試合だった川口 ～Aマッチ認定基準変更～

この本を作ったことで、協会側にも動きがありました。

先日、日本代表のAマッチの認定が変更になったのをご存知でしょうか。僕が本の中で、「これはAマッチじゃない」とか「あれはAマッチのはずだ」と書いたのを小倉純二さん(JFA 副会長)が読み、データベース検討委員会を立ち上げAマッチの見直しをしました。

最も影響が大きかったのは戦前の試合。第2次大戦前の試合は、これまでAマッチ認定がされていませんでした。本来だと先日のキリンカップでAマッチが 500 試合に到達するはずだったのですが、データベース委員会で認定・認定取消しなどを行なったため、若干のズレが生じ、もう 500 をだいぶ超えてしまっていたことになりました。

その影響を受けた一人が、川口能活(ジュビロ磐田)。彼は3月のペルー戦(2007年3月24日)でAマッチ出場 100 試合の表彰を受けましたが、その後の委員会で取消しがあり、実はあの時点では 99 試合だったんです。

本当の 100 試合のときに再度表彰しようか？ もう代表に選出されなかったらどうしようか？ オシム監督に頼んで早く選んでもらおうとか？(笑)なんて、表彰したものを取り返すわけにもいかないので協会も困っていたのですが、彼はキリンカップの第2戦で無事に 100 試合を達成しました。

今回の認定の見直しで、他の選手にも、出場が減ったり、あるいは出場歴が1試合ついたりといったことが起こりました。新たに集計したものについては、協会やサッカーマガジンが今後発表していくようです。

この本でも「全 1021 試合」としていますが、試合として認定されないものが出て減ってしまったり、せつかつけた試合番号もつけかえなくてはいけない。これを修正したものを、何とかもう一度出さなければいけないなと思っています。

## 9 歴史もの調査の醍醐味

次は、非常に興奮した話を一つ。

日本チームの初の国際試合である 1917 年のフィリピン戦——協会設立前のため今回の見直しでもAマッチ認定されず——に、アルカンタラという選手が出場していました。

アルカンタラはバルセロナ(スペイン)で個人の最高得点記録を持っていて、クラブの公式サイトでも大きく紹介されている選手。執筆作業の最後の段階に、彼がフィリピンチームにいたという事実を知ったときは、この本を作るなかで最も興奮した瞬間の一つでした。

パウリーノ・アルカンタラは、父親がスペイン人で、母親はフィリピン人。フィリピンで生まれ、後にスペインへと移り住みバルセロナに入団しました。バルセロナで作った最年少得点記録と最高得点記録はいまだに破られていません。ちなみに、最年少記録の第2位はリオネル・メッシ(アルゼンチン代表)です。

1917 年、医学の勉強のためフィリピンの大学に戻っていたアルカンタラは、フィリピン代表として来日し、芝浦で日本代表と対戦しました。

2002 年の初版本では、日本に残っている資料の片仮名表記からとって「アレアンタラ」と記載していたのですが、片仮名のルとレ、カとアというのは誤植が多く、実はずっと前から、アレアンタラという名前に疑問を、そして「アルカンタラ」である可能性を感じていました。

他方、バルセロナで大活躍したフィリピン人がいたということも昔から知っていた。しかしこの二つは僕の頭の中で全く結びつかず、全く別の知識として持っていました。本を書いている間もずっと気がつかなかったの

ですが、それが、最後の最後に、自分でもなぜか分からないけれど調べてみようと思立ち、バルセロナのウェブを立ち上げたのです。

すると——アレアンタラではなくパウリーノ・アルカンタラという名前で、日本戦にもフィリピン代表として出場したと、確かに書いてある。それで二つの疑問が一気に結びつきました。もう少し早く気づいていれば写真も掲載できたのですが、本当に最後の段階だったのでできず、残念です。

歴史について調べていると、今回のアルカンタラのように、ある情報と、全く関係ないと思っていた別の情報が、実はつながっていることに気づくことがあります。それが、歴史ものの調査での一番の醍醐味のような気がします。

## 10 次に調べてみたいのはチョウ・ディン

いま興味があるのは、1920年頃日本にいたビルマ人の留学生チョウ・ディンさん。早稲田高等学院のコーチをして有名になり、その後、日本各地をコーチしてまわった人です。賀川さんにも、神戸一中が指導を受けた話などお聞きしましたが、チョウ・ディンがどんな人物だったかについてはほとんど分かっていません。東京工業大学の前身・東京工業学校に留学して紡織の勉強をしていた人物で、今のミャンマーの首都ヤンゴンで繊維問屋をしていた家の人らしいんですが。

資料編を作っているときに、ビルマ人選手の片仮名表記がかなりいい加減だったので、元のスペルと片仮名表記を一橋大学のビルマ人の留学生に見せて、名前の読み方を教えてもらったのですが、そのビルマ人がけっこう昔のサッカーにも詳しく、「日本のサッカーはチョウ・ディンというビルマ人にお世話になった」という話をしたところ興味を持ったらしく、帰国したら調べてくれるということになりました。

それから、チョウ・ディンがショートパスのサッカーを日本に伝えたといわれているが、ショートパスといえばスコットランドだという話をしたら、「ビルマの政庁に駐在したイギリス人は、スコットランド人が多い」なんてことも聞けた。確証が取れてはいないものの、そこでまた様々な知識がつながり「おお～！」という感じでした。

彼は今年の春に帰国したので、とにかく向こうで調べて、手がかりをつかんだら知らせてくれることになっています。何か見つかったときには僕も現地へ乗り込んで調査するつもりです。でも、現地は今とんでもない独裁政権が支配していて重要な資料はみんな燃やしてしまったらしい。また、あれこれ調べていると秘密警察に付け狙われるから止めた方がいい、なんてことも言われているのですが…。

まあ、とにかく現地に行ってみるとするのはどんなことでも楽しいし、それでチョウ・ディンの足跡が分かったら面白いですね。

## 講演2: 賀川浩氏(後藤氏の講演を受けて)

### 1 個人の力の差が大きな点差に

先ほどのフィリピン戦、日本は2-15で敗れているのですが、1試合で15点入れようと思ったら、それはそれで大変なんです。僕も中学時代、35分の試合で16-0というスコアで勝ったことがあります。

得点するのがうまい選手がいれば点はいくらでも入りますが、シュートが決まったら、またハーフラインまで戻らなきゃいけない。最後には、「おい、もうゴールを入れるのを止めようか」なんて話になりましたね(笑)。

それと同じようなことが、ベルリン・オリンピック(1936年)でもありました。1回戦のスウェーデン戦後に日本選手の体力が回復せず、さらにイタリア選手に削られた影響もあるのですが、イタリアにはライトウイングに一人すごうまい選手がいて、彼の存在が大きかった。

『美の祭典』という映画で見た彼は、オンラインのボールについて走るんです。ボールは内側に回転しながらライン上をまっすぐ転がっていて、ラインを割らない。川本泰三曰く「その彼にキャプテンの竹内悌三(FB)が見るも無残にやられ」、そこからボカボカ点を取られた。個人個人の力の差が大きいと、それが時にものすごく点差になって現れる場合がある。そんなことを思いながら、後藤さんの話を聞いていました。

## 2 心の目と耳を開いて

チョウ・デインさんと早稲田のサッカー部を作った鈴木重義さんが並んでいる写真を見ると、彼が東南アジア半島の人種ではなくて、インド人の系統の顔つきで、体がスラッとしていることが分かります。

同じころ、ビルマから日本に4人の留學生が来ていましたが、彼らはいかにもビルマ人という顔つき。その中にサッカーに熱心で、東京の高等師範付属中学に教えに来てくれていた人がいたけれど、やはり彼もショートパスを説いていたから、ビルマ全体でスコットランド式のサッカーをやっていたということなのでしょう。

チョウ・デインの指導を受けた僕ら神戸一中は、神宮大会で太田哲男さん(元・東京教育大学監督)のいた青山師範を破ったのですが、日本サッカー協会の75周年パーティで会った時、その敗因を「神戸一中の方がサイドキックのダイレクトパス、つまりショートパスがうまかった」と言っていました。

ショートパスはチョウ・デインが大正12年に残していったもの。それによって日本全体が上達し、さらにはベルリン・オリンピックへとつながりました。

面白いことに、関西ではなぜかショートパスがあまり広まりませんでした。「バカの壁」という言葉がありますが、聞く耳がなければそれは聞かなかつたのと同じことになる。

第一次大戦後、関西学院と神戸一中はチェコの軍人たちと試合をしました。神戸一中の連中は後にチェコチームのサッカーがショートパスだということに気づき、それを日記に書いたのだけれど、ロングパスが中心だった関学の連中は何も残さなかつた。良い先生がどんなに良いことを教えてくれても、皆が心を開かなければ何も伝わらない、受け取れない。

「物を見るのは精神であり、物を聞くのは精神である。眼そのものは盲目であり、耳それ自体は聞こえない」。デットマール・クラマーも言っています。

釜本にも、同じように心の目が開かれた時期があつたようです。2日前(26日)に元西ドイツ代表監督のデアバルさんが亡くなりましたね。その話をしたとき、こんなことを言っていました。

「自分は正式な移籍ではなく留学だったから、ブンデスリーガの試合を見ることはできても出場できる身分じゃなかつた。だけどドイツに行っている間は、良い試合も見て、良い指導者のもとで、23歳以下のプロの卵たちとガンガン練習できた。それでいて、ガムシャラにプレーしていた1967年よりも体が休まった。今思うと、あのときにストライカーのイメージができた気がする」。

常に必死に練習する環境から離れたことで、彼の心の目と耳が開かれた。そういうことかもしれません。

### 【質疑応答】

会場:アイスランドの件は、当時の選手には聞かれたのですか？

後藤:データベース委員会でも、聞いてみようということにはなっていますが、まあ覚えていないと思います。

賀川:いや、これはね、たぶん俊さん(岡野俊一郎)か健さん(長沼健)のところにメモが残ってるよ。あるいはミュージアム。

後藤:でも、協会の中の委員会で喋っていても出てこないんですね。

賀川:うん。まあ協会はタテ割りやからね。いっぺん誰かの尻を叩いてやらせればええよ(笑)。いくらなんでも代表の試合だから、残ってると思うよ。

後藤:ええ、そのハズなんですけど、協会にはないって言うんです。小倉(純二)さんの名前でアイスランド協会に問合せしてみようという話もあるんだけど、それもまだ…。

賀川:釜本なんかは、得点のことまでみんな覚えてるよね。

後藤:どういう形だったかは覚えていても、相手までは覚えてないんじゃないかな(笑)。

賀川:いやいや、これが覚えてるんだよ。いつだったか釜本の得点を整理したとき、協会の資料で彼の得点になってるゴールについて聞いたら、「これは僕とちやいますよ。桑原の兄貴の方ですわ」とか言ってたもの。

後藤:ほおー。

賀川:選手の記憶といえば、健さんがこんなことを言ってたな。



ドイツ1部のボルシアMGと戦う前にオランダの2部のチームと試合をしたとき、ドイツの記者にはオランダのチームと戦ったことは言わないよう口止めされたそうです。そんなことを言おうものならボルシアMG側が「オランダの2部と接戦をするようなチームと、なぜ俺たちが試合をしなきゃいけないんだ」と言い出すからと。

ドイツの1部チームにとっては、東欧のオリンピックチームと戦うのは良くて、オランダ2部に負けるようなチームと戦うのは面白くないわけですよ(笑)。

後藤:フィル・ボールという、レアル・マドリードのことを書いているスペイン在住のイギリス人に話を聞きに行ったときです。イギリスのグリムズビー出身だという彼に、日本代表とグリムズビー(当時3部)が試合をしたことがあるのを知っているかと聞くと、「俺が小学生のときだ。ウチの3部のチームがナショナルチームと戦って、張り切って見に行ったぞ!」と(笑)。そんな話で盛り上がりました。

賀川:それからデータと言えば、(入力時の)打ち違いがあると、後々ものすごく困るよね。影響が大きい。

僕が本をまとめなかったのが悪いと、後藤さんだけじゃなく武智君(日経新聞)にも言われるんだけど(笑)。僕は産経新聞というしがない新聞社の、最も儲かるサンケイスポーツの編集局長なんかをしていたから、それは難しかったんですよ…。専門誌に書くことは大事で、僕もサッカーマガジン等にも書いていたけれど、単行本でも出そうものなら、それで新聞の売れ行きが落ちようものなら、「アイツは何をしてんねん」という話になる。だから自書、単行本は一切出さず、書くとしても、「監修」ということにしたんですよ。釜本の本もそう。

それから、後藤さんも苦労されたと思うけれど、本は、記録(数字)と本文を照らし合わせるのが大変。スポーツ新聞では、記事本文と記録欄の打点・安打・失点等の照合が一番うるさいわけですが、専門家、校閲部の古い連中は記事の種類によってミスしやすい場所が大体分かる。そういうプロがいないと、実際に本を作るのは大変なんです。

僕自身、毎日その仕事をしていたからよく分かる。

オウンゴール(OG)について書いているという木ノ原(句望)君に、古いオリンピックで、スペイン代表のキャプテンがOGをして泣き伏したという記事を読んだことがあると教えたときのことで。

話をしたからには、僕も実際の記録と照合しておかなければと思い、日本協会発行のオリンピックの記録を確認すると、なんとスペインじゃなかった! FIFAの記録を調べたら、僕の記憶どおりスペインだったのだけれど、協会の資料は、移すときに一行ずれてしまったのでしょう。

このように過去の記録に何か間違いがあったとき、それだけを見て間違いはないと思って書いてしまったら、そのまま永久に誤って伝わってしまうおそれがある。いま話題の年金問題は、だいぶずさんだったからあんなったのかもしれませんが、でも、やはり何かを書くときにはミスは起こるものです。

それから運動部時代。相撲の星取表が県版も含め15日間全て正しく表記されていたので、担当者を表彰してくれるよう、運動部長が局長に持ちかけた。だけど局長はにべもなく「こんなもの合っていて当然だ」と。運動部長は怒って「それじゃあ、アナタも一度全部やってみるといい。県版に載せる地方出身力士の白黒勝敗、それから運動面に載せる十両以上の勝敗。ここにどれだけの白と黒があるか、これを一日も間違えないことがどれだけ大変か、分かっていますか!?!」と食い下がり、とうとう部長賞を勝ち取ってきました(笑)。

まあ、記録というのはそれくらい大変なものなんです。何か誤りを見つけたときは快哉を叫ぶのではなくそういう目で見て、「ここ、ちょっと違ってますよ」と連絡して下さい(笑)。

後藤:いやいや、快哉叫んでくださってもいいですよ。ミスを見つけてくれるのならね(笑)!

会場:Aマッチの定義づけはどのようなものなのでしょう。

後藤:これは歴史的にも結構違います。

昔は、ホームチーム側がA代表なら、相手がユース代表などでもAマッチとして認定されることがありました。今は、両チームともA代表でなければAマッチにはならない。

今回の本の中でも、相手チームがA代表なのかどうかという点で判断が難しいものがありました。例えば、1981年にきたポーランド代表。ポーランド協会の記録ではAマッチになっているのに、日本側はAマッチ

に認定していない。僕は、日本のメンバーはA代表なのだからAマッチにすべきではと提案したのですが、ポーランドのメンバーを見ると監督もメンバーも(実際のA代表と)違っていると、今度のデータベース委員会でもやはり認定されませんでした。

定義といってもまあ最終的には、前後の試合のメンバーと比べて、本当にAマッチと言えるかどうか判断するしかないのでしょうか。形式的なものだけでは済まなくなりますね。

賀川:先ほど、ラグビー界から「サッカーよりラグビーの方が先だ」と反応があったという話がありましたね。

僕は自分でも校内大会でスクラムハーフをやっていたくらいで、ラグビーも好き。オールブラックス(ニュージーランド代表)の本も持っているんだけどね、それによると、戦前に二度来日しながら、日本代表とAマッチはしていないことになっている。

つまり、日本代表はブルーのユニフォームを着ているU-23 みたいな顔ぶれだったり、ニュージーランドは黒のユニフォームを着ているけれど、それは若駒でフル代表のメンバーではなかった。だから向こうでは、日本とは正式の国際試合をしていないことになっている。一方、日本協会では正式に国際試合をしたと記録されている。とまあ、そんなこともあるんですよ。

後藤:そもそもラグビーの場合、国際ナショナルボード(IRB)の加盟国でないとAマッチとして認められませんでしたよね。

賀川:うん、そうだったね。

それにしても、最近のサッカーは何であんなにAマッチを貴重がるのか…。今の日本で一番困るのは、技術委員会が、歴史に対する認識を一つの時の流れの中で見ようとしないうこと。

田村(修一)君がトルシエと『オシムジャパンよ!』という本を出したでしょ。トルシエの意見はともかくね、彼は若いけれど、フランス人らしく、一つの流れの中で日本代表をとらえている。自分のときはこうだった、ジーコはどうだった、それを受けて今オシムはこういう流れでやっている、と。ちゃんと、そういう物の見方をしている。

今の日本の技術委員会は、オジェックやFIFA コーチの翻訳はたくさんするけれど、日本サッカーはこういう流れの中からどんな技術が出てきて——という点が抜けている。

最近再び「センターハーフ(CH)」という言葉が出てきました。昔は「ロービングセンターハーフ」というのがいたわけですが、今また、それに似たものが現れた。技術部はただその言葉だけを取り入れるのではなく、それがどこからやってきたのか、その流れ、解釈を若い人たちにしっかり教えてやらなければならない。だからこそ、データベース委員会や歴史研究会には、技術部ともっと話し合いをしてもらいたいと思っています。

Aマッチで何点取ったということは、記録としてはもちろん大事。でも例えば、釜本がフィリピン相手のAマッチで6ゴール挙げたことはモチロンすごいけれど、アーセナルというクラブチームから1点取ったこともまた、すごいことです。両者の間には、技術的にはどういう意味があるのか——。記録や格付けと同じようにそうしたことを考え、数字(記録)に付記するのも大事なんじゃないかなと思います。

後藤:そうですね、何でも数字になってしまうと…。いわゆるシステム論や戦術だけで試合の結果が決まるような、そんなことを論じる人が今は多すぎますよね(笑)。

賀川:だから試合後の記者会見で「今日はワンタッチプレーが十分ではなかったように思いますが、いかがだったでしょうか」なんて質問が出るんですよ(笑)。